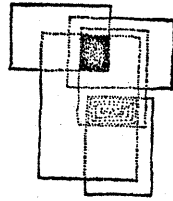


子どもと共なる日々



豊田 芳子

一九七九年 七月四日

初めて病院へ行きました。私達が心待ちにしていたことが起こりました。お母様も喜んでくださいました。共なる日々の始まりです。

こうして一九八〇年三月に長男温土はるとが生まれ、二年後には次男寛土ひろとが生まれました。二人の相手をするように

なつてからは、育児と家事で一日がちょうど終わりになつてしまふりかえる時を殆んど持たなくなつています。そのことの反省も含めて、前の記録をとり出し、この小文をまとめてみることにしました。

*

心をとどめてみると

一九八一年 十一月十六日(月) 温土一才八ヶ月

私の朝食の片づけや洗濯など一時間程の間、かたわらにいたり、ひとりで汽車や空箱で遊ぶ。ゴミを出しに行こうとすると、「はるとも行くー。」とついて来る。さあ、いったん外へ出ると砂遊びがしたい。私は掃除機をかけたいと思っている。午前中にお客様がみえるのだし、少しはきれいにしておきたいという気持ち。温土はまだひとりで砂遊びはできない。というより、誰かと一緒に遊びたい。それはわかっているが、玄関の戸を開け放して私ひとり先に二階へ上がる。(我家は二階にある)「はるとも、はるともー。」と言う。自分もおかあちゃまと一緒にいたい。ただし砂遊びをしてという気持ちのようだ。「はるとも」と言うわりに、一緒に二階へ上がろうとはしない。そのうち下で、「ママー、ママー、こぼしちゃったの。」砂ならこぼしてもさほど困らないので悠長に、

「そーお、大丈夫よ」などと生返事をして掃除を続けていると、なおはっきりと熱心に呼ぶ。彼の要求にすぐ応じる程、私の心が彼に向いていないのが少し後ろめたく、またかわいそうになってきたのでよしこころで少し見に行つてやるかと降りていくと、玄関の足ふきマットの上にバケツの砂がこぼれていた。彼はとても失敗した、いけないことをしたと思つてゐるらしい。「あらあら、ここにこぼしちゃつたの。そーお大丈夫よ。でも気をつけてね。」と言いながら、私が外でマットの砂を払うと、見てもらつた満足、大丈夫と言われた安心感などでとてもおしゃべりになって、「こぼしちゃつたの。はると……こぼしちゃつたの：×○……？ こぼしちゃつたのねー。」といつもの可愛いしぐさをしている。それを見ていると、こちらもう少し余裕がでて、ほうきとちりとりを出し、丁寧に掃いていると、「きれいにする」と温土もほうきを受け取り、たたきを掃き始める。「はい、ちりとりも貸してあげますからきれいにしてね。」と声をかければ、得意になつて掃除をする、そして私はまた私の時

を得て二階へ上がった。五分程すると、温土も自分で上がって来た。家事と育児はだいたい相入れないことが多い。どちらかを犠牲にしなければ何もできない。育児だけをしている時は、家事は全く頭に置く必要がないが、家事をする時は子どもを忘れてはできない。私は今の仕事をしていたあなたの方を向くことができない、あなたを待たせているという意識、いつでも持っていないくは。

子どもと大人が互いに明らかに、ああ、これは楽しいと感じられるできごとがあったわけではないけれど、このように日常の淡々とした生活の流れの中で少し心をとどめてつき合った時、子どもも大人も充実した感じを持ち、互いに目には見えない心の豊かさを積み重ねていくのではないだろうか。

……ができるようになった日

日々の習慣的な流れとは少しちがう、心の踊るような

時を過ごした日は、成長の階段をひとつ大きくのぼるきっかけになる事があるように思えます。それまでじっくり貯えてきた力が目に見える形であらわれ、成長として子どもにも大人にもとらえられるのです。そんな一日を主人の記録より

一九八二年 六月二十八日(月) 温土二才三ヶ月

とても梅雨とは思えない程カラッとよく晴れた一日だった。いつもの時刻に帰ると温土は「おかえりなしゃーい」と元気で飛びついて来る。今日は昨晚私がゆっくり寝られたせいかな、自分が元気で、温土との一時を楽しむ。ベッドで新聞を読んでいると「はるとも寝よう」とと来るので一緒にゴロゴロしている。なんだか温土をいじめたくなって、倒したり、くすぐったりすると、いかにも楽しそうにキャッキョッと笑う。その後、一緒に風呂。顔に湯をかけると少しべそをかかなくかまわないふうをしてザーザーかける。温土は「ふいてー」と半泣きになる。でもその後は「おふるって、きもちがいね」などと言っている。最近石けんで洗うのに凝っ

ていて、いろいろな物をひとり洗っている。私の背中もよく洗ってくれる。息子に背中を洗ってもらえるようになったのかと思うと感無量である。二人してすっきりした後、気持ちのよい夕方なので温土を自転車に乗せて散歩に行く。私自身幼い頃によく行った気に入りの線路沿いの道からしばらく山手線を見おろす。二人で同じ物を見るのは楽しい事だ。私は生ビールが飲みたくなって帰り路に焼鳥屋に寄る。酒場に子どもをと思わないわけではなかったが、店がすいていたし、他の客に迷惑をかけていないし、二人して楽しい時を持つかと入る。膝で温土は焼鳥半分を嬉しそうに食べる。早く一緒に飲みたいたいものだ。帰り路に店でブドウを二房買う。温土を前にすわらせ、その前のかごにはブドウというわけで時々二人してつまみながら自転車を走らせる。夕暮の空には半月、口には甘いブドウ、風は夏草のにおい、こんな一時を温土と持てて最高。自転車から降りると温土は「アンちゃんにもあげようね」（隣りの子ども）と言うので良い事だと思い、窓越しに夕食中のアンちゃんにブドウを

一房あげる。温土としては、一粒のつもりだったようだが、私が一房あげても、少し意外といった顔をしただけで、あまりいやな顔はしない。夕食は焼鳥を食べた事もあつてか、まあまあ。早くブドウを食べたいらしい。「もう、ごちそうさま？」と聞くと、「ぶどうを食べたらね」と答える。ブドウの柄を持ちながら大事そうに食べ、とうとう全部食べてしまうと「あーあ、とうとう木になっちゃった」と実のない房を見ている。ごちそうさまをして椅子から降りるとパンツがぬれちゃったと言う。思えば夕方風呂から出てからおむつをしていなかったわけだ。さぞかし良い気分であっただろう。女房が「今、出たの？」と聞くと「そう」と言う。「もう少し早く言えばよかったわね。」と言いつつズボンを脱がせると「お手洗いで練習してみようか」と温土を誘う、この辺のタイミングはさすがだ。温土も今までだったらいやがる所を一向にその気配もなくトイレに行く。「出ましたか？」「はい」等としばらく遊ぶ。温土は紙でふいてくれと言う。それもごっこ遊びの内だし、私としてはト

イレに関する手続は全て温土に任せてやりたいと思つていたので、女房に本當にふいてやればと助言する。そうこうした後、温土は女房にトイレから出るように言う、女房はちゃんと感じてそれに従う。しばらくして温土に呼ばれて女房がトイレに行つてみると何と本當のウンチが立派にしてあるではないか!! スゴイ!! 両親は二人して大喜び。温土も自信ありげに作品を見ている。今度は本當にふいてやつた後、ウンチャンにバイバイをして流す。三人とも少々興奮気味。ぼくはすっかり嬉しくなつて温土にまたブドウを分けてしまった。温土は何と言おうか自分自身に感動しているようですっかりはしゃいでしまひなかなか寝ようとしなひ。我々も温土の喜びが分かるのでそれを少し大目に見ることにした。温土は遊びながら「ウンチャンできたのねー」と言う。いかにも成長の自覚といった感じだった。女房とは、まあ今日の事は単に偶然だとしておこうと相談する。その方が温土によけいなプレッシャーをかけずに済むだろう。一番大事にしたのは温土自身の喜びなのだから。ふりかえつ

て思うに、今日の夕方は私自身ゆとりがあつて温土も楽しく満足した一時を過ごせたのだと思う。特にこうなさい等と言わなくても、温土が満足な時を過ごす、温土の心の中で何かの力が温土を一つ大きくしようとするようだ。そしてその事が家族の喜びとなる。こんな自然な成長があつていいではないか。待つ事に乾杯!! 女房の常々に感謝!!

こんな事があつた後、おむつを全く必要としなくなつたのはそれから一ヶ月半後の事でした。二年半待つただけに、失敗の数はとても少なく、親のイライラは殆んどありませんでした。ついつい過大な期待をかけてしまつた時も、すぐに「いい、いい、またおむつをすればイライラしなくてすむのだから」と軌道をもとに戻すことができました。そして温土がおむつを必要としなくなる日があつて来たのでした。ひとりで食事ができる、お手洗いに行くことができる、衣服の着脱ができるようになる過程では、その達成直前に、できたり、できなかつた

り、しようとしたり、頼ったりの波があり、子どもも大人もイライラさせられます。しかしこの時期こそ、子どもにとっては大切な時期ではないでしょうか。させられていると感じるか、してみようと思えるかで全く異なった力が育っていくのです。イライラは最少限におさえて、それほど遠くない将来にできるようになることを願い、信じ、手伝ったり、励ましたり、ほめたり、時々は黙って見ていきましょう。子どもはだましましたと言いますが、だますのは「私の心」である時もあるようです。

むすび

このように考えてくると親としては心と体にゆとりをもって生活していくことのどんなに大切であるかにあらためて気づかされます。楽しい気持ちでつき合おうと、さりと流れることが、こちらに少しのゆとりもなければ、ささいなことにこだわり、ぶつかり合い、かたくなになり、こじれてしまいます。不快な空気が家中にひろがって、共にいることがいやになってきます。しかし親

も人間ですから肉体的に調子のよくないこともありま
す。そんな時にゆとりを持つとうとしても無理です。そこ
で私は、今は眠くて何もしたくない、あるいは疲れてイ
ライラしている、仕事がたまって焦っているなど私自身
の状態を把握し、自覚してなるべく伝えるようにしま
す。そうすると今度は子どもの方で、できる限り譲った
り、我慢したりしてくれるようです。そして私がそれを
いとおしく思い、そこに歩み寄りが生まれ、また共にい
ることが楽しくなります。まさに日々このくり返しにほ
かなりません。この現実の中で両親が互いに信頼し合
い、多くの和やかな時を子どもと共に持つことができ
ば、子ども自身の力が成長の方向へと自分自身を導いて
いくであろうと信じています。

※

※

※